

講演「放牧酪農の実証例」(丸藤牧場の取組紹介)

講師：中川町 丸藤牧場 丸藤 英介

○取組

1 なぜ放牧酪農	2 目標とする酪農
○3つの人生目標 ①笑顔の多い家庭を築きたい ②一生でき、やりがいのある楽しい仕事に就きたい ③所得と時間に余裕のある人生にしたい	①牛が心身ともに健康 ②飼料自給率の高い経営 (自給粗飼料で乳量5,000kg以上) ③循環型の放牧酪農 ④自然を活用する(微生物や菌など) ⑤薬品・濃厚飼料の使用を抑える ⑥100年以上続く牧場作り

○丸藤牧場の概要

①道外出身

②24からヘルパー・研修等で7年間の下積み

③道北(中川町)に新規就農(11年目)

④5人家族

⑤労働時間3900時間

(本人2600時間、妻1300時間、ヘルパー年間40日利用)

⑥施設

・フリーストール 54床

・オートタンDEMパーラー 3頭ダブル

⑦乳牛頭数(H30)

・経産牛 39頭 (平均産次 3.4)

・育成牛 21頭

⑧乳量

・経産牛1頭あたりの年間平均乳量 7400kg

・年間出荷乳量 288t

⑨飼料

・「放牧期」「舎飼い期」と給餌方法を変えて行う

・パーラーで搾乳している時のみ配合給与し、配合飼料の給与量は個体毎に管理

⑩放牧

・大牧区 9.5haを用い、ローテーション放牧

・牧草地の分類

放牧専用、放牧兼採草(1番草収穫後は放牧)、採草地 と3つに分類している

・草地の土質

粘土質6割、泥炭土質4割

・年間の放牧日数

180日間

・育成牛1群管理

夏場は、終日放牧し、飼料は、放牧草のみ

⑪ローテーション放牧で気をつけていること

- ・草高20cmとし、伸ばしすぎないように平均草高を意識
- ・全体牧区の草量を把握し、14日ほどのローテーション計画（予定）をたてる

⑫泥炭地の管理

- ・草地更新しても、ふん尿だけでは、地力がやせていく（兼用は特に痩せやすい）
- ・「植生の維持・向上」「牛の嗜好性・健康性」を考えた肥培管理が必要
- ・肥料は、春の散布で、1番草～2番草まで肥効持続性があるものが有効

○放牧酪農をして感じたこと

メリット	注意点
<ul style="list-style-type: none">・放牧草の高栄養等を採食できる・飼料自給率が高く濃厚飼料を抑えられる・放牧地で運動するため、足腰の肉付きがよく健康的・牛の経済寿命が長く、生涯泌乳量が多い・放牧期の労働時間が減少・機械の消耗が低い	<ul style="list-style-type: none">・つなぎ飼いの場合、牛を定位置の場所に入れるのが課題・舎飼い期と放牧期の移行準備・四季に応じた作業の多様性・牛、草などの観察力が重要・大規模化が難しい

○その他

①就農前の準備

- ・実際に見て場所を考える（実習で行ったことのある地域など）
- ・安全に作業をする方法を学び・考える
- ・「牛・草・土の気持ち」を、土の「化学・物理学・生物学」と学術的に考える
- ・地域に入込み、前向きで、諦めない心（精神）を持つ
- ・自己資金400万円以上貯める

②就農地の選定

- ・人間関係、縁や絆を大事にする
- ・搾乳牛40頭規模なら、放牧地15ha以上は欲しい
- ・放牧を受け入れてくれる地域を選ぶ

③就農

- ・事業計画書は自分でも作成。もし、農協で事業計画書の作成援助があった場合は、事業計画書の内容を確認する
- ・1年間、1日の作業時間の計画を作成する
- ・異常にすばやく気づける観察力が必要（牛、機械、建物を見る、音を聞く、振動など）
- ・すぐに使える現金、400万円以上は必要
- ・借金返済を早くすることに固執しない。余裕があったら繰上償還
- ・分娩・助産は、研修・勉強し、状況と時間の要素を入れた表を作成する
- ・牧場にあった、牛の改良・繁殖管理も必要